嗚呼、思へば、青年の戀は、活きんとするもの〻大毒蛇なり。

而かも、吾れ今日あるを得たるは、何の力ぞや、ア、造化萬有を貫きて、輝き來る天の神秘力は、偉大なるかな。

嗚呼、吾が救は天より流れ來たりぬ。

思へば、實に吾は上天に向て、感謝するの外なし。實に吾が過去の恩寵を天に感謝し、更に後來を天祐に祈りつ〻、理想の光明界に突進せざる可からず。

天の美惠よ、上帝よ汝は眞に慈愛なり。而して吾が戀愛は、只管ら汝に向つて、敬虔の念と共に獻げんのみ。

萬感胸に迫りて、垂れたる頭を仰ぐれば、流星飛んで、森に杜鵑の聲あり。

二十日の弦月は、白茫として、影淸く札幌の天、札幌の野を照らしつ〻あり。

さくやき

山の人

これは日頃讀んでゐる露のツルゲーネフの『遊獵者の手記』中の一篇を獨逸譯によつてものしたものである。素より反譯によつて其眞を寫すことは出來難い。自分のはいはば影の影である。たゞ輪廓だけ寫したのだと思つて頂けばそれで自分は滿足する。

時は秋で、九月の半頃、自分はとある樺林に坐つてゐた。

朝早くから、時々美しひ雨が短かい、暖かな日の光で邪魔されながら降つて、誠に定りあさ日和で

あつた。天は毛のやうな白雲で蔽はれ、折々ろの絶間から、彼方此方に冴えた空がチラ〳〵。雲は開いて美しい、聰しい眼みたやうな、澄み渡つた、奇麗な空の碧を見せるのであつた。

自分は坐つて、四邊を見廻し、耳を傾けた。

木の葉は自分の頭の上で、ザワ〳〵してゐる。ろのざわめきで、どんな季節が自然を支配してゐるか、直ぐ知れるのである。春の爽やかな、心地のいゝざわめきではない。夏の幽かな私語でもなければ、初秋の慮した、涼しい戰ぎでもないので。漸く聞きとれる位な、夢の如き唸である。弱い風は、どうかかうか見分けがつく程、梢を動かし、雨に逢つた林の中は、太陽が見える度に、雲が空を蔽ふ、毎に絶えず變るのである。

空が清らかに晴れると、林の中のあらゆるものは、さながら笑へるやう。左程密生してゐない樺の細い幹は、俄に素絹のろれに似た、柔らかな輝きをうける。地上に横たはつてゐる、薄つぺらな木の葉は、樣々に彩どられて、金色の光のうちに輝き、其あはひには羊齒の高い莖が、已に熟し過ぎた葡萄とも見ゆる秋の色で飾られて、光つてゐる。

と思ふと、俄にあたりのものが眞闇くなる。奇麗な色は見る間に消え失せ、樺は色褪め澤なく、今し方降つた雪を、冷やかに笑ふ冬の日影が、まだ接吻しないかのやう、白くなる。盜人のやうに忍んで、美しい時雨が再び、森を潜つてバサリバサリとやりだす。

樺の葉は、尙まだ少しは綠であるが、それもはや褪めかゝつてゐる。そこ此處には紅や、黄色の、疎らかな若木が生えてゐる。雨で濕つて、光つてゐる細枝の、重り合つた間を漏れて、華やかな日影が射し込めば、この若木の、どんなに蘇生するかゞ見られるのである。

一羽の鳥も聞かれない。彼奴共は皆塒を求めて、默りこんで了つた。たゞ時として山雀の冴ゑた、調子のいゝ聲が響くのみで。

自分は、この樺林で坐所を撰む前に、犬を引連れて、高い白楊の森を通つて來たのである。自分は、この白楊を、格別好むといふことはない。青白い幹と、出來る丈高く伸ばして、風に擴げた金屬光のある、灰綠色の葉とを備へてゐるのであるが、自分は、いつでも其長い莖の先で、不作法にゆら〳〵として、圓い、不規則な葉が、搖いでゐるのを好まないので。

白楊の面白いのは、多〳〵の夏の夕方のみに限る。低い藪の中から、たゞ獨り突立つて、沈みゆく太陽の薄紅い光に向ひ、根から頂まで黃味を帶びた緋色を注がれて、光りをの、いでゐる時や、若しくは、うら、らかな風ある日に、サワ〳〵といつて蒼空に舞昇らうとつとめ、葉といふ葉は悉く戰ぎ、遠方に飛び去らうと思つて、身を引ちぎらうとするやうに見られる時、面白いばかり。

けれども一概にいへば、自分は白楊を好まない。で、一寸其處に体まうと、白楊の林には止まらなくて、樺林まで行つて、其處で一本の木の下に坐つたのである。そが枝々は、低く地上を蔽ふてゐるので、雨に濡れないやう、自分を庇つてくれることが出來、其上遂に自分は、たゞ獵師間に馴染である、例の心細い、靜かな眠をなしたのである。自分はどの位眠つたのあらうか、言ふとは出來ないが、目を開くと、身のまわりのあらゆるものは、日光て照らされ、四方には心地よくザワ〳〵としてゐる葉を透して、麗らかな蒼空が輝いてゐたのである。雲は風から吹き分たれ、離れ離れになつて、天氣は晴れた空には稍心を勵ます、あのいひしれぬ、乾ひた爽かさがあつて、何時でも不愉快な日の後に、穩やかな、華やかな夕が來る徵候とも見られるのである。

自分は更にわが獵運を試さうと思つて、丁度立かけた時、俄に、身動もしない人の姿に、目がついた。自分はもつと近く眺めやつて、さて一人の村娘であることを認めた。

娘は自分から殆んど二十歩ばかり離れて座り、考へこんで頭を垂れ、兩手を膝の上にのせてゐた。半ば開いてゐる一方の手には、野花の太い花束がのつてゐたが、呼吸する度に、碁盤縞の上衣に觸れた。首と腕のとこで、釦を掛けてある瀟洒(さつぱり)した、白い襯衣は胴のまわりで、優しい、柔らかな襞をつくつてゐる。ろして、太い、黄色の眞珠の紐は、首のまわりで二重になつて、胸のあたりまで吊されてゐる。誠に美しい娘だ。房々とした、さわやかな、光澤のある、淺褐色の髪は、心を籠めて梳られた二つの束になつて、狹い、紅の額帶の下からこぼれて、象牙のやうに白い額のまわりに、絡まつてゐた。顔は奇麗な膚にあり勝の、あの優しひ金色を呈してゐたのである。

娘が俯向いてゐるので、目を見ることは出來なかつたが、やさしひ、弓形になつた眉、長い睫毛は認められた。睫毛は濡れてゐた。少し色を失つた唇の上に、やつと止まつた日の光で、頰の、乾いた涙の痕が、まだ輝いていた。頭は愛らしく、稍太きな、丸い鼻も疵とはならなかつた。其容貌は自分を見惚れさしたのであつた。誠に顔付は瀟洒(あつさり)して、温和さうで、可憐で、其上もち前の心配の上に、罪のない愁に溢れてゐた。

定めし乙女は、誰かを待つてゐるのだ。

森の中に、靜かに響が起ると、娘は頭を擧げて、四邊に目を配る。木蔭のほの闇いうちに大きな、輝いた、牝鹿のやう駭かされた娘の眼が、自分の前にチラリ。娘は音が聞かれるやうになつたろな方から、大きく開いた目を、暫らく放さずに耳を傾けた。が、太息して、徐ろに花をかき寄せながら

ら、一層低く垂れた頭を、微かに動かした。目は泣いたので赤くなり、唇は悲しげに震ひ、更に湧きくる涙は、濃い睫毛から流れ、頰の上にとどまりながら輝く。

稍しばし時がたつた。

可憐な娘は、身動きもしない。たゞ時々焦つたささうに手を組んで、再び耳を欹だてた。

又森の中で、何かけはひがする――娘は身震ひした。

音は其儘消ゑもせず、判然なる。近づく。

遂に急ぎ足の響が聞かれた。娘は立上つて、氣を失ふやうに見ゑた。其視線は、絶ゑず滑る。娘は待ちに待つて、待ち佗びて、悶えたのであつた。木の間越しに、男の姿が見られる。娘は見上げて深い吐息して、悅ばしく、樂しさうにほゝ笑んだ。跳起きやうとしたのが、直にガッカリしたやう、色蒼ざめ、心配な樣子――娘は、近づいて來る男が、向うに立止まつた時、誓ふやうな目付をさし向けた。

物好にも、自分も隱場から、この男に視線を向けたが、好ましい心がしなかつた。この男は、或富有な若殿に仕へてゐる、ブラジルの侍者とでもいふ可き風をしてゐた。身扮は雅致と、裝飾者のしだらない風との、矛盾を表はしてゐる。恐らく主人の持物らしい、短い、青銅色の上衣の、上まで釦を掛けたの、紫青色の緣のある、薔薇色の襟飾、金色の鉢卷をした、目のあたりまで引込んでゐる、黑い、天鵞絨の帽子を着けてゐた。白襯衣の襟りは、無慈慈に耳を擦り、頤のとこで切れてゐるが、糊引の白い袖口は、金銀の指輪で飾られた、赤い、丈夫な指の先まで屆いてゐる。

其赤い、活氣のある、厚がましい顏付は、度々自分が觀察したやうに、よくそれ、多く男には嫌は

れるが、女子間には、幾倍も好かれるといふ、例の人相の數に漏れないので。

この男は、其野卑な人柄に、鷹揚な、悠長な態度を與へやうとつとめ、さなくとも細い、厭らしい目を、絶えず絞つたり、瞬たいたり、口を開いて、切りに五月繩さうに欠伸したり、赤い顳顬や、厚い上唇に生へてゐる薄い毛を、手際よく撫でたりする――一口にいへば極めて退屈さうに。

この男は、自分を待つてゐる、若い百姓娘を見ると、すぐ大儀さうにやりだした。ノソリ〳〵と女の方に歩み寄り、立止まつて肩を聳やかし、兩手を上衣の隱しに突込んで、澁々若い乙女に一瞥を與へながら、地の上に坐つた。

「む、、お前はもう長く、茲に居たのかい。」足を動かし、欠伸をしながら、始終側の方を見つ、、男は口を開いた。

乙女は直ぐ、返事をすることが出來なかつた。

「えゝ、長いこと。」女は遂に、やつと聞きとれる聲でいつた。

「あ、。」――ヴィクトルは帽子を脱ぎ、勿体らしく、殆んどすぐ顳顬のあたりから生へた、密な、櫛で梳かれた頭髪を、手でかいて、重々しさうに、あたりを眺め、其鷹揚な頭を再びグタリと垂れた――「あゝ、俺は悉皆忘れてゐた。其上雨まで降りやがつて。」再び欠伸した。「眼が舞ふ位、非常に忙しい。何もかも、頭のなかへ詰込んで置くことが出來ないものだから、主人からさへ叱られるんだ。時に俺共は明日立つよ。」――

「明日。」と、乙女は繰返し、驚いて相手を見つめる。

「む、さうさ。」娘が慄へて、頭を振つたのを見た時、男は激しく、五月蠅さうに口を開いた。「アク

リナ、まあ泣くない。俺の切ないことを知つてる癖に。」かういつて平つたな鼻を歪めて、「じやなくちや、俺は直ぐゆくよ。泣くたあ、まあ、何て馬鹿だらう。」――

「いね、妾は泣きませんよ。」アクリナは、つとめて涙を押隱しながら、悲しさうに吃つた。「では、貴郎は、明日れ立ちなの。」一寸期間をれいて言つた。「だが何時また遇はれませうね。」

「無論、遇うことは遲うさ。來年でなければ――さう、もつと遲いか。主人はヒータースボルクで役につくかもしれない。」更に言葉を續けて、稍鼻にかけながら、「けれどもな、外國に往くかもしれんよ。」

「貴郎は妾を忘れるでせう。」アクリナは悲しげに言ふ。

「いゝや、どうして。俺はれ前を忘れはしないが、れ前は、ただぢつとしてれ出で。馬鹿になるな。れ父さんの言ふことをれ聞き。れ前を忘れはしない。」――ヴイクトルは長めていつて、更に欠伸した。「忘れないでね。」誓ふやうな聲で繰返し、「妾が貴郎を愛したやうに、何んでも何んでも貴郎の爲。貴郎は、妾のお父さんのいふありにせと被仰るけれど、どうしたらいゝんでせうね。」

「どう」ヴイクトルは、腹からでも出たやう、言ひ放つて、仰向きに寐て、手で頸筋を突張つた。

「はあ、貴郎は知つて被居る。」――

娘は默した。併し、ヴイクトルは光つてゐる時計の鎖をいぢつた。

「アクリナ、れ前は馬鹿な娘ぢやない。」ヴイクトルは遂に口を開いた。「それで愚なことはしやべるな、俺はれ前が出來ることをするのよ。分つたか。本當にれ前は分別のないものぢやない。いはばただの百姓娘とは違ふのだ。れ前のれ母さんも、全く違つてゐたんだ。れ前は稍教育も受けてゐる。そ

れだから、た前に言つたやうにしなくちやいけない。」

「でも、それは餘りですもの。」

「ふむ、馬鹿。小供ぢや。何にが餘りかい。――そこに持つてゐるのは何かい。」ヴィクトルは、娘の方に振向きながら、俄にかういつた。「花かい。」

（未完）

漢詩

送鐵石大尉赴臺南次其留別韻　落合東郭

澎湃波濤激有聲。王師遠戍又南征。廳堂吏納經年稅。蕃部賊爲結社盟。燈火高臺臨海峙。豫章大木帶風鳴。炎荒地盡鶯鸞鼻。想見樓船似葉輕。鶯鸞鼻有大燈明臺

其二

薩皷無端響嶺隅。千林箐深幾時枯。歪頭弔眼拜營幕。殘堠斷關看地圖。戰士辛酸元有分。朝廷恩遇豈終孤。征蕃未若賞蕃好。五十二區來獻珠。吳歪頭陳弔眼臺灣俘因名見于甌北詩

湖海曰。蒼蒼老老。奇肆滿紙。中有自切時事者。詩之與境相稱。所以帶嚴厲氣。純是一氣。使讀者忘其爲聲律對偶文字。此足爲沾々於矩矱者發聾啓聵。

得唐陽軍醫新年作次韻即酬　仝

三河何處路茫茫。難得豐橋一葦航。別後風塵愁不少。客中倡和意方長。新年茅屋早聽雨。老樹梅華纔點霜。珍重天涯故人贈。題襟集裏認珠光。唐陽贈曾賓谷賞雨茅屋集賓谷號題襟主人結末故及